こしやの光

物語の巻

御遺文

おすゝめ……一
佛典物語……三

附録

御逸事……一四
御七回忌……三〇
聖人と私……三四
願ひ……三八
感想……四三
牌前に額きて……四六

追慕……五〇
佛恩……五四
慈父……五六
追慕……五八
光明學園……五九

御七回忌記念出版

「慈悲のたより」の一節……六四
「道詠集」の一節……

おすゝめ

空海が心のうちに咲く花は彌陀より外にしる人はなし。

世に此歌を弘法大師の道詠と傳へられてゐる。何人の歌でもよい、此道詠の如くに信心の花が開く時は**ミオヤ**の彌陀に知らるゝ人と爲る。さうなれば此方からも眞に**ミオヤ**を信じて中心から彌陀を慕はしく感じらるゝやうになる。宇宙は本より大**ミオヤ**の所有である。すべての生ける者は皆其の子である。然れども生れたまゝの人は佛の卵である。卵のまゝでは**ミオヤ**の在すことを知ることできぬ。**ミオヤ**の慈悲の懷にあたゝめられて信心の心が孵化る時始めて**ミオヤ**の愛護を被むるやうに爲り得らるゝ。然らばいかにせば**ミオヤ**の慈悲にあたゝめらるゝやとなれば、經に**ミオヤ**の慈悲の光は遍ねく十方を照せども念佛する者のみを攝取して捨玉ぬはと。我等念佛して**ミオヤ**の光にあたゝめられて信心開けて佛の雛子と爲ることを得。已にさうなる時は、ナムアミダ佛と唱く聲に**ミオヤ**の慈愛はいつでもうけてゐる。雛がピヨ〳〵と鳴くころに親鷄はコッコと呼びかはすやうになる。かやうに我等信心開く時は**ミオヤ**に知られてゐる人となる卵のまゝでは親の愛のうけやうがない。願くば我同胞の衆よ、疾く信心の心が開きて佛の雛となりて、彌陀より外に知る人はなしと自信の立つやうに爲りて**ミオヤ**を嘗ふ子として**ミオヤ**の愛護の下に價値ある日暮を爲るやうにならまほしきに御すゝめ申すことに候。

二

佛典物語

沙彌僧大

舍衞國に厲と云ふ家あり。大に富めり、己に年老て繼嗣なきを憂ひて日月天神に禱れども更に驗なし。自ら念ふに、斯く神に祈願するも効なく、寶財消散し產業は修まらず、疾病相續き種々の不祥のみ重なり來るを嘆き、是全く殺生して神明を祀るは甚罪重し、今より悔ひ改めて佛法に歸せん。佛法は高尙なる聖學、斯道を奉し唯淸白無欲なれば眞の樂あり。現在は心安穩にして終には天上に生ずべしと。一に三寶に歸して一載餘にして婦に男子を生む。佛大と名づく。後にまた男子を生んで僧大と云ふ。

三

僧大は稟性慈孝にして萬物を慈しみ、佛法を信奉し沙門に親近し清淨にして知足なれば二親は殊に之を愛せり。厲が病に臥し床に着き、長子を呼んで遺訓に曰く、汝能く佛の教誡を守らば必ず安穩なり。僧大は尚幼少なれども仁孝なれば方に汝に囑むに依つて能く慈しみて吳れよと。言ひ畢りて冥目しぬ。僧大は其後兄に願ふて沙門に作らんと希望しける。其國法として婦を得んと欲せば具さに沙門に作らんと願ふ時は得ると云ふ風習なれば佛大は弟の爲に妻を娉せんとて賢家の女を索む。快見と字け、華色美麗端正無比なりき。婦は歸ぎて堂に昇る。兄は賓客を招きて祝儀を設け、衆の前に於て弟に謂つて曰く、汝は稟の如くに今日沙門と作るや。僧大答へて曰く、我本宿願なれば願くば遂げさせて玉へよと。弟は兄の許を辭し、歡喜して禮を作して山に入るに、一の壯年の沙門あり。其形貌端正にして獨り樹下に處するを見て、問うて云く、賢者は何に緣つて沙門と成り玉ふぞ。其沙門は已に應眞の道を得しかば豫じめ宿命を知り僧大に謂つて曰く、佛說き玉ふ。人婬佚を好めば炬火を執つて風に逆て行くに等し。其炎捨てずんば還つて手を燒くが如し。我は斯の過を見て沙門と爲れり、と。また詳かに其過失を說く。僧大之を聞いて深く感銘して稽首して曰く、願くば我も世の濁を去りて自ら淸淨の道を履み、高く菩提の道に階らんと欲す。沙門曰く、汝山に入りて道を修めんと欲せば能く時節を知れ、而して水と火と麁密とを貯置せよ。然る所以は盜賊來りて水火麁密を求むるに若し之を給與せざれば賊必らず害を加ふ。僧大教を承けて拜謝して山に入る。家に於ては兄の佛大謂へらく、弟の僧大は已に僧と爲りて妻を蓄へず。快見は無比の美人なれば心竊かに悅こび快見の心を奪つて己に順はしめんとの野心が勃々と發つて其情を誘ふ爲に琴を彈じて婬佚の曲を歌ふ、曰く、煌々たる麟金は野田に生ず、時過ぎて採ざれば宛然棄てらる。莖爾たる豐熾華色惟れ新なり、馥郁として芳を放つ。我と同じく歡ばんと、快見は己を誘惑することを覺りて歌うて答ふ。巍かき我師は天人の尊、門徒は淸潔謐て沙門と曰ふ。眞を觀て聖と爲り、婬するを畜偷とす。我は嚴戒を受けて二君に事へず、終に婬を生せず、寧ろ寸分に就んと。佛大亦情悲の曲と委靡の辭を作り、宿心爾を嘉す、故に良媒に因る、名を問ひ師に詣つて相良時を占ふ。慘々惕々として爾が來らざるを懼る、既に爾が顏を視て我心怡々たり、今歡を合せずして豈に徒らに費さんや、斯誓是定まれり、淑女何ぞ疑はん、快見兄の心を惶惶として歌を以て答ふ。佛は禮儀を設けて尊卑序あり、叔妻は即ち母、增伯は即ち父、我親しく戒を奉け、日に隆舉あり、眞は聖と齊しく、婬すれば正に蟲鼠、噫乎伯子焉ぞ斯語を爲すや、之を聞きて兄の心は益々貪迷て彌々强て逼らんとすれば、快見は嫌忌と懼れとが益々强まり、歌つて曰く、夫れ人の世に處す、當さに二事を遠ざけん、不孝と婬亂とは行ひ佛戒に違く、天及び賢者其の自巽を箋すと。佛大は執拗に快見を愛著して捨つること出來ぬ。亦歌ふて曰く、爾が容色蓮花の如し、普天の美女豈に爾が顏有らんや、我心相悅ぶ、故に大山に超えたりと。此を聞きて快見は何とも恐怖に耐えぬ。此人我を執して悖狂の亂を爲す。如何なる大難の身に來るやを憂ひ、請ふ己が身中の惡露不淨を說いて厭忌の心を生せしめんには如かじとて、重ねて曰く、仁我體を貪り玉ふ。此體何の好か有らん、頭に九骨あり、合して髑髏と爲る、乃至具に體の不淨を說いて兄の心を解かんとす。快見は肉欲を以て己を愛して逼り來る兄に對しては厭忌と怖懼とに壓せらるゝ感あり。而してまた己を顧る暇なく深く佛の道に志して志節雪より潔よき僧大が山に入りて修學してゐる。それを戀して忘るゝこと出來ぬ。佛大自ら念ふ。彼女は其夫を念ふが故に我に隨はぬ。寧ろ弟を殺して仕舞へば我に隨ふこと疑ひなしと。行きて數多の賊の中に募り求めて、賊に語りて曰く、汝知るや我家に畜へてゐる六籍の奴子あり、今は逃れて山中に在るを。賊の曰く、我之を識れりと。佛大曰く金銀を出して之を與ふるに依て汝彼の奴子を殺せよと。而して其頭と及び身上の衣と所持の衣服と足下の履とを皆持ちて還れよ。然らば復重ねて金銀を與へんと。本より殘忍なる賊共、大に悅びて然らば其命に隨ふ故に復必ず金銀を賜へよとて去りて忽ちに山に入りにける。彼の殘忍なる賊僧大の所に到り呼んで曰く、沙門よ汝疾く出て來れよと。其弟出でゝ曰く、諧

君何をか求む、吾に水火麁密あり、之を食ひ玉へ、時已に夜半を過ぎぬと。其賊曰く我等水火杯を求むるに非ず。汝が頭を持ち去らんと欲するのみと。弟之を聞いて大に怖れて泣いて曰く、吾は長者諸侯の子に非ず、俗を棄て道に入つて世と爭ふこと無し。道を學び日淺くして未だ眞の道を得じ、吾を殺して何の益か有らん。賊の曰く、我等來ることは唯汝が頭の爲である。弟また賊に語つて曰く、寶を得んと欲せば吾兄の許に書を以て卿等に寶を惠まんと。賊の曰く、汝何を云ふ、子が兄よりも我等を使して子を殺して其首を持て來よとの命であると。之を聞いて弟は粗兄の心意の有る所を覺りて曰く、吾今死することは斯婦の爲である、されば我が師が前に我を戒めて、人婬の爲に炬火風に逆うて手火に燒かるとの訓誡を思ひ出し、涕泣して賊に向つて一歲の命を延されんことを乞ふ。賊の曰く、急に頭を取り來れとの約束なれば夫はならぬ。僧大曰く、然らば願ふ處卽に我頭を斷つこと勿れ、初めに先づ我一髀を斷ちて我前に置き玉へ。賊卽ち一髀を斷ちて其前に置く。弟此痛に遭ひ、天其側に來て曰く、愼で恐怖すること勿れ、牢く汝が心を持せよ。汝前世の時畜生の中に生れ屠割して其肉を賣られたること幾度ぞ。また地獄餓鬼の身を受て苦痛せること曠劫已來窮りなかりし。僧大天に白さく、請ふ、我師に報じ玉へと。天卽ち通力を以て其師に語つて曰く賊今其弟子を殺さんと欲す。悲泣して哀れみ、師に相見んと欲すと。之を聞て師は通力を以て飛往いて法を說て曰く、天地須彌も尙滅し海も消渴ことあり、七日にして破壞す、ヒバラン風は山河大地を搏ち消す力あれどもまた滅することあり、況や汝が小軀をや。但當に一心に念佛すべし。佛常に言く、生者必滅、會者定離、榮華保ち難し、身亦是の如し。此限りある身を捨て佛の永恒の光明を求むべしとの敎に僧大は佛の光明を專念して預流道を得たり。復一髀を斷ぜられて一心に念佛して一來道を得、又左の手を斷たれ一心念佛して不還道を得また右の手を斷るるに一心に念佛して應眞道を得たり。已にここに至れば生死自在にして復畏るる所なし。僧大曰く、願くば我が爲に樹の皮を取つて來り給へ、賊は樹の皮を剝いで與ふ。僧大は枝

を取つて筆と爲し身の血を刺して樹皮に書いて曰く、吾大兄よ、時に隨ひ起居安全なりや、二親在ます時吾は兄を累はすを以て兄之を承けず。親の敎に違き女色を以ての故に骨肉相殘ふ。親慈の敎に違くは是不孝なり。人の命を殺す是不仁なり。一の畜生を殺すすら罪少からず。況や應眞に於てをや。吾は已に眞の道を得たれば善く寂靜に遊ばん。此よりは長く別る。努力して願くば眞の道を崇び玉はんことをと。書きて此を兄に授け玉へと、頭を伸して賊に語て曰く、子吾が頭を斷つ猶泥頭を截るが如し、吾は已に眞の道を得たれば遺憾なし。唯汝等が地獄に墮せんことを恐る。願くば心を改めて善に還れよ。言ひ已れば賊は前みて頭を斷ち身の衣杖履及び鉢を取り持ち去りぬ。賊は其の首等を持ちて兄の所に往いて之を與ふ。兄は悅び金銀を以て重く賊に謝す。兄は弟の頭を以て假身を作り頭を上に著け衣を着せ杖鉢及び履を其傍に置きて快見を呼んで、汝が慕ふ所の良人歸り來れり、之に問訊せられよと。快見は一たび袖を分ちてより已來、片時も忘るる事なき僧大の歸り來ると聞て大に喜び踴つて走り薄闇き一室に到り其目の閉づるを見て冥想觀念せるものと思ひて敢て呼ばずして去り、具さに美饌を作り、念道の覺めたるを須ち、當に之に供せんとす、日中すれども覺めざりしかば、妻前んで曰く、日今は已に中す、時過るを恐る、請ふ食し玉へと。其應せざるを怪しみ衣を牽けば頭脫げて身は分散す。妻は悶絕し叫んで曰く、子我に坐つて殘賊せらると哀憤天に呼び肝心崩裂血口より出で奄然として逝きぬ。アア哀しむべし、快見戒行淸白にして汚れざること淤泥の蓮の如し、心を聖範に樹て動き難きこと地の如し、眞淨行高きこと天の如し、其未だ終らざるに諸天咨嗟し其靈魂を迎へて淸き天上界の人と爲して天上にて難盡の樂を得る身とはなりぬ。兄はもはや快見が僧大のこの狀を見れば斷念して心を轉じて我に依る外なしとて、室に入つて視れば弟の頭と身と分散しておるのみならず、己が戀念して止まぬ快見は血を吐いて亡しである。其狀態を見ては如何に我儘勝手の兄とても耐えられぬ。卽ち曰く、咄々吾れ天に逆へる所作酷烈の爲に此に到る。天地の間に身の置き處なしと卽ち賊の所に至りて弟

の臨終の狀態を聞きたくなつた。弟が沒するに臨み、如何に言ひしや、賊は遺言を以て兄に授く。兄は悽惻して書を讀み已つて五内咽び塞がり涕泣交々胸裂けんばかり我尊親に違き慈教を亡じ骨肉相殘ふ。又彼は我弟と雖も已に應眞道を得たり、之を殺せり、ア、我は地獄の業已に熟せり、天に訴へ地に訟るに處なし、弟の僧大は道の爲に身を殺されたるも已に應眞を得たりき、ごれ道に於て遺憾なし、實に其志操の高き、讃歎すべしとて、國王及び臣民涕泣して其情德を歎逃して遺骸を殯葬し塔を建て其德を頌すと。

僧大は道に入て日未だ淺しと雖も其志深きが故に迅く應眞を得たり、彼は短時間を以て道を得んと欲し一髀と手と斷つ毎に一心念佛して道を得たりと。我等は日々時々刻々毎に己が年命の割截せられつゝあることを覺らず、幾年空しく精力を費し、幾時徒らに生命を促めぬ。アア我ミオヤよ、我等又佛大の如くに親の慈教に違ひ己が肉欲を貪る爲に貴き光陰を空しく費す。往昔の佛大今現に我身である。

老僧アバータの發心

天護と云ふ豪商あり。陸求那國に往きて慈善を樂みとし深く佛を信じたりき。先に海に入りて若し安穩に還らば、佛法中に五年の大會を開きて土地の人民に法を聞かせんと志を陳ぶ。其事が國内に聞え渡れり。時に羅漢の比丘尼ありて其附近に住しける。瞑想に入つて、天護は安穩に還つて大會を作し得らるることを知りて、また一萬の比丘を請じて皆羅漢にて、また學人も數人あり凡夫僧も又數多である。其上座の比丘婆陀を見れば凡夫である。尼はアバタの覺醒を催がす爲め、僧房に入り、次第に禮を作して上座に謂つて曰く、大德よ、今大德を見るに甚だ端嚴ならずと。上座自らおもふに何故に我を不端嚴と云ふにや、鬚毛の長くのびてをるその爲ならんと。年少の沙彌を喚んで髮を剃らしめた。尼は復不端嚴と云ふ。上座また衣服を着替へても尼復た不端嚴と云ふ。上座瞋りて曰く、我已に鬚髮を剃り衣を洗浣し竟る、何故に不端嚴と云ふや。答へて、今日佛法には肉眼にて視ゆる形や衣服を以て端嚴と云はず、應眞の道を得れば眞に端嚴と爲るなり。大德聞き玉ふや、天護商主が諸の大德を請じて五年大會を作すことを。答へて曰く已に聞けり。曰く、大德は凡夫にして第一の上座と爲り已に道を得たる羅漢衆の中にて先づ供養を受けなば是莊嚴なり哉不や。大德之を聞いて啼泣懊惱す。尼言く、大德何故に啼泣し玉ふぞ。答へて曰く、姉よ、羅漢道を得たくも我今已に老いて修行に堪えぬが故にと。尼曰く、如來の正法、時節また老少なし。大德よ那哆婆哆寺に往いて優婆笈多尊者に就いて修道し玉へ。此尊者は佛の記し玉ふ第一の教師なりと教へけり。そこで長老比丘は直ちに優婆笈多の許に詣でければ、尊者出迎て語つて言く、大德よ、洗足消息するや。答へて曰く、我未だ洗足せずと。優婆笈多を見んと欲すと。弟子の曰く、大德よ、是即ち優婆笈多にて來り迎ふなり。大德歡喜して便ち自ら洗足し、優婆笈哆之を教化し玉ふ。施主よりの洗浴飲食の供養を受く。尊者維那に告げて曰く、今二の解脫を得。比丘坐禪處に入れば數多の羅漢も悉く禪處に入る。此時に比丘が第一禪座の處に入つて座する時に、尊者が火光三昧に入ると、數多の羅漢も火光三昧に入る。時に比丘之を見て心歡喜を生ず。尊者は比丘を教化し玉へば比丘精進して應眞道を得て本國に還りぬ。羅漢の比丘尼は僧伽篋に往きて禮拜して白さく、今日大德實に莊嚴已に成れりと。大德悅んで曰く、是全く貴尼の力なり。若し貴尼の獎に依らざれば自ら自己は羅漢果を得るの分に非ず、自暴自棄して終るべきを此に至りしは全く貴尼の力に依れりと深く感謝せり。其後五年の大會に天護上座に問うて言く、世尊種々の說法と上座の所說と異ることなし。上座答へて曰く、過去九十一劫に我等商主と爲りて海に入て寶を採る。誓つて船に滿て還る時に大風に遇ひ船が沙海に墮ち、我等毘婆尸佛の爲に沙を聚めて塔を爲り種々の供養を獻ず。時に諸天我に道路を示す。七日の後に大水來つて船が本州に入るべしと。果して七日にして本國に入ることを得、已後九十一劫惡道に墮せず。今阿羅漢果を得

たり。汝今能く供養す、汝宜しく出家すべしと。天護旨を承けて、沙門と爲り羅漢果を得たりと。

ミオヤの光は滿天滿地照さざる處なし。何人も己が現在の我は罪垢深重にしてミオヤの光に接せざれば靈に活きること出來ぬを信じ、唯己が無知罪惡なるを信じ、ミオヤの心光を仰ぎ、一心不亂なれば、必ず光明に觸れて、淸き人と生れ更らん。今の老比丘の如き若し悟道の尼に値はざりせば羅漢は己が分にあらずと自棄て已らんと。

讀者よ、今現に此處にミオヤ在ますに非ずや。老比丘は數多の羅漢衆の火光三昧に入る相を見て自分も一心に摧勵して道果を得たり。

諸子能く念佛して光明を獲得し玉へ。

辨榮上人御逸事（其五）

五香　善光寺　辨誠　輯錄

上人未だ御在俗の折、家に在りて農事勉勵、朝な〳〵星をいたゞいて草刈りに出で給ふに、御歸路、あるひは惡童等相計りて態々草籠等を横たへて苦るしめるに、未だ曾て一度もこれを取り除きしことなく、遠くまで迂回して歸り給ふが常なりければ、さすがの彼等もついに愧ぢて惡戯を止めたりしと。

○

久しきより篤信なる某町の豪商、某家は、日常の習ひとしてか、上人御招待の折なども多く肉類がちに御供養せられける。一日亦そが供養を受けたまへる時、家人にうち解けさせられてのたまふ樣、「折角の御供養ですから何んでもありがたくいたゞきますが、ナンデ、出來ますことならなるべくは御精進の方が結構でありますが……」と、仰せられます。

○

上人曰、「吾人の心性を穢す煩惱は、恰も明月を遮ぎる浮雲のやうなものだ。が、然し見樣に由つては、そが彩雲となつて、却つて月の美を增すことがある」と。

○

上人曰、「一より二に出で、二を含んで再び一にかへる」。

○

上人曰、「社會は如來の展開し給へる一の劇場で、吾々は俳優の樣なものである。されば貴賤、貧福、幼老、男女各々形骸を異にし、年壽を異にし、職責を異にして多種多樣なるも、一度演劇の幕（死の幕）下りて登場の俳優みな樂屋へ歸へり、かつらを外づし、紅粉を洗ひ、衣裳を脫すれば、解くれば同じ谷川の水で、共にこれ南柯一場の夢である。

然し夢を以て終始してはならぬ。聖典に示す、此土一日の修行（演舞）は、彼土百歳のそれに勝ると。凡夫は只五十年の舞臺面のみを見て、永遠の樂屋を知らざるが故に一時の現象に悲喜顚倒して、或は人を呪ひ天を恨み、果ては夢の浮き世は兎角太く短かくなどゝ思へども、如來は常にこの兩面（舞臺と樂屋）を看給ひつるが故に、世のそれと異りて靜かに、人の歸り來るを待ち給ふ。

一時的俳優なるが故に、必ずしも不變の役目に終始するものではない。藝題の仕組によりては一流千兩役者も時に丁稚下郎の微賤に扮し、幕外の十兩役者も或は高位顯職を演ずることもあらう。が、然し、一度演舞の幕下りて樂屋に歸る時は顯職の榮譽を荷ひし十兩役者も千金は報酬せられず、却つて微賤に着きし千兩役者の上には自づと千金の報酬が與へられるのである。千兩役者は、その全く微賤者に扮りきつたる技能の上に、觀衆の喝采を博し、興行主はこれに千金を報酬するのである。職業に貴賤なし、人生亦かくの如く、吾人は共に同じき一俳優として、如來より仰せつけられたる各自職責の上に向つて、最善の努力を致すべきである――」と。

○

又曰、「稻に肥料を施るのは、やがてその藁の中に良き米を收獲せんが爲めである如く、吾々の肉體がいろ〳〵の營養を攝取することも亦、このうちに心靈の實をみのらせることに意義を認めねばならぬ」と。

○

古歌曰、闇の夜に鳴かぬ烏の聲きけば、生れぬさきの父ぞ戀しき。

上人解し給はく、旭日の如く世間の闇を照破したまひし牟尼世尊八十年の化緣盡きて、拔提河畔鶴林の夕に滅を示し給ひしよりこのかた、彌勒尊佛未だ下生し給はねば此の中間暫く、日は入りて月未だ出でざる闇の夜に喩ふ。即ち吾人は二佛の間の迷ひ兒なり。

鳴かぬ烏、とは、殘されたる黃卷赤軸の經文に喩ふ。文字は黑色なれば烏の色黑きにたとへ、而も人ありてこれを讀誦せざれば音せざるが故に、鳴かぬ烏に喩ふ。

生れぬさきの父、とは吾人未生前の慈父、即ち三身卽一の**ミオヤ**なり。

言ふ意は、日は入りて月はまだき中空のくらきに迷ふ吾々も、示し遺されたる經文の聲きけば、失はれし本の都に我が迷ひ子やあると待ち詫び給ふ慈父のいとゞ慕はしとなり。

我をして愁思多からしむ、父子相逢はん日の何れぞや。

一休と白隱とは中心があつたやうだ、とのたまひき。

○

上人曰、「禪宗の修行は、池の水を淸澄して、魚を釣り上げんとし、念佛は、反對に水をゴチャ〳〵と溷濁して魚を掬ひとらんとするやうなものである」と。

○

上人曰、「南無とは梵語、支那に歸命と譯す。歸命の歸の字に嫁（とつぐ）の義あり、とつぐとはトツ、クの意、例へば、老人が杖にトツ、キ、處女が良人へトツ、クの類なり。阿彌陀佛とは無量壽佛なり。無量壽如來なり。故に南無阿彌陀佛とは無量壽如來へトツ、クの意、即ち幻影的分限我なる吾々が、永世的普遍我なる絕對至上者へ嫁ぐこと、換言せば、如來に凭る生活の開始せられること、神と偕なる靈的生活を始むること、光りなき電球が電線に接續して光輝あらしむるの謂なり。

一人の娘も未だ處女時代には、只己れ一人なるが故に（暫らく兩親を離れたりとして）日々の生活上に突發し來る種々の問題について、兎やせん角やせんなどゝ思ひ煩らひつれど、未だその思ひを偕にして力せらるべき良人を持たざる程に、たゞ獨りなる自己の狹き胸の中にのみ廻轉して解けざれば、その負擔の重くして堪へがたく、あらぬ憂惱の中にのみ悶々すれど、一度、良人に嫁ぎて二人なる强き生活に轉開すればその强き蔭に凭り添ふが故に、凡べての負擔のさきにもまして輕安なるが如く、吾人亦、本より天に在して然かも內心に囁き給ふたゞひとりなる　大**ミオヤ**に背きて自ら

と恐怖憂惱の中に獨生獨死して流轉來しより以來、常に幻滅と不自由の中に涙の乾く間もあらざりけれど、一度、ミオヤの喚ばひ給ふ御聲に迷夢さめて、自己を彌陀の方に投じ去りて、その中に死なざるの生活を開始めける程に、曾ては無常幻滅をかこちし世相の上にも、何時しか寂光常住の春ふきて人生を莊嚴せしめ給ふるは、これ偏へに、我れ彼れにトツギ、彼れ我をして力しめ給ふが故である」と。

○

又曰、「極樂の莊嚴常樂を聞いて生せんと願ふのは、財產を目的に嫁がんすとる者の如く、阿彌陀佛ましませばこそ、火の中、水の中をも厭はじと願ふのは、人格本位で高等なるものである」と。

○

又曰、「道路の善からんを祈ること勿れ、如何なる路にも打ち挫かれざるの力加はらんとこそ願へ」。

○

上人曰、「何は兎まれ、まづ念佛申すべし」と。

○

一日、談、たま〳〵一枚起請文のうへに及ぶや、上人の給はく、「眞摯なる求道者が宗教の意義を探求し、尊き念佛の中に自己を體驗し行かんと、いろ〳〵に騷命しつゝある折などに、側より、ヨク一枚起請文を引き出して、我宗の意は左樣な六ケ敷き觀念や、參究の念佛ではない。宗祖かねて末代衆生の、さる徒ら事を止めさせんとして御臨終の夕、重もい頭を上げさせ給ひてこのことを特に遺戒したまへるのである、と求道烈火の裡に一抹倦怠の氣を投せんとするやうなものを見聞するが、然し今時宗祖御在世のやうな、熱烈に觀念を凝らし、參究の念佛に沒頭して居る樣な徒輩が何處に在るか。むしろ何でもやつて見た方がよいことだ。知らずや一心の赴くところ、ともにこれ如來に親近すべき妙行ではないか。と。

（寒山曰、世有二一等流一。悠々似二木頭一。出レ語無二知解一。云我百不レ憂。問レ道道不レ會。問レ佛佛不レ求。子細推尋者。茫然一場愁。）

○

又曰、一枚起請文は、御本尊に對つて讀誦すべきものではない。御本尊は、ソンナ事はとうに御存じのことだ。アレハ御本尊から、吾々衆生の方へ對しての御教誨である。故に眞宗では御文章を讀む時に、導師が御本尊に代つて衆生の方に向つて讀むがその方が本意に叶ふて居る。と。

○

一日座談の折、或人の尋ね參らすらく、如來今現に此處に在ます、とは申せ、千里の古刹靈跡などに燒香せんとする時の、一入と有り難く覺えられて候は如何候哉と。

上人曰、それは丁度溝などを飛び超へる時、直ぐと溝の側に立ちて飛ばんとするより、五六間も手前の方より走り行きて、その勢いに乘じた方が超へ易い樣なものでしやう——乃至、路はるかなる、信濃の善光寺へ參詣せんとする時、兼ねて聞きつる靈驗のかずかずと、そこに到るまで途上幾多の困難に光り增されたる思慕の念願が、處、異なり、心、新たなる敬虔の中に、一入と然か感せしめられたるのであらう。と。

（而して靈佛、靈驗なきにあらず）

○

一とせ、きさらぎ半ば、恩師を案內して五香より小金驛に到らんとす。名にしあふ高原の惡路は一面に霜解して往還（大道り）は通らるべきもあらざれば、人々いづれも人の庭、畑等の中を通行して纔かに步行をたすく。

末弟亦た、先だちて畑の中を橫斷して進む程に、恩師また後へに從はせて御老體を運ばせ玉ふに、やがて通り終れるの時、顧みさせて、「あゝいふ人の畑を通つても宜いものであるか」と問はせ給ふに、末弟「はい、良いのです」と答へ參らす。恩師曰、「否、決して良いのではない、良いのではないが、あの場合止むなく御ことはりして

通させて貰ふのである、」と訓戒し給ひき。

○

さる僻地の一小寺院なる、住職某師、永らく地方傳道に懸命せられけるが、その功果の餘りに微々として揚がらざるに倦怠せられてや、むしろ其地を棄てゝ他へ轉住せばやなどゝ、思ひ惑はせ給ひつゝありし折しも、上人たま〳〵このことを漏れ聞き給ひつる事ありて、慰勵し玉はく「キリスト教にコンナ話がある。貴師は如何思はれ候や。――曾て、さる處に二人の傳道師あり、各々その傳道の爲めに、甲は一都市へ派遣せられて止住すること十年、百人の信者をつくり、乙は蠻地へ赴任して同しく十年只僅かに一人の信者を得たるのみ、此二人の功勳、果して何れぞや」と。暫らくにして徐ろに告げ給ふやう、督敎の意はむしろ後者を義として居る。と附言し給ひて、更らに言を繼がせ給ひ、思ふに甲の往ける地は從來既に種々の良緣によりて、人々の信仰も相當に培養せられし處へ、更に甲の誘導、薫發によりて錦上更らに錦を飾つた樣なもので、云はゞ甲は一面に於て、場所的幸運兒とでも云ふべきであるが、乙はそれに反し、赴任の地は未だ曾てさるが如き勝緣にも遇はざれば人心荒れ果てゝ未だ三法の御名をも聞かざりき、さるが程にこの荒れ果てし心田開拓の爲めには刻苦十年にして、而も酬ひられしものは只一人なる信者のみなりしならん。が、然し只表面上なる結果の如何と數の上計りに着目せで、此二人が道に努力せし腐心の輕重を如何せば、寧ろ乙を以て勝れたりとするのであらう。

神は世間のそれに異りて、只、已が、その上に捧げし努力の多少をのみ看給ふ。俗に云ふ、緣の下の力持ち、とて隱德は宗敎上の一大秘義である。

貴師も幸ひ勝緣に任せて其地に在るものなれば、只徒らなる數の多少にのみ左右せられで、たとへ一人たりとも、自已が全努力を投げ出して邁進せられては如何哉、と。

某師、即ち靡然として意解け、悅び滿てる面地にて抵頭三拜して辭去せられたりき

○

上人曰、「人は提灯の御蔭によりて、夜行恙なく歸宅すれど、之を返却す時は、提灯に言はで、貸し呉れし人に對して禮言を述ぶ。今もその如く、吾々は太陽の力によつて日々生息すれど、そを通して、道はし給へる神、本源に在す人格的本尊に對つて感謝するは、高等なる宗教意識である」と。

○

上人、善光寺に住ひ給へる頃、折に觸れて或人へ談り給ふ樣、自分は何處で占てもらつても、長生きは出來ない、と云つて居ます、ヨ、と。

○

上人曰、送葬の儀は恰も在校生が、卒業生を餞けする送別會のやうなものである。刻苦十年、琢磨の功成りて業を修了へ錦を飾りて目出度校門を出で去ることは、出る者、宿年の本懷であり、送る者決してこれを悲歎すべきではない。悲しむべきは寧ろ幾とせ經とも卒業の樂譽擔ひえで、來る年もくるとしも同じき學校に沈滯することである。

人生亦かくの如く、五十年修行研鑽の功なりて娑婆の學校を卒業し宿年の誓願を顯現しえらるべき、慈父の御許に錦飾らんことは、諸天、皷をうち妙華を雨らしてこれを讃歎する所以にして、送る者亦ひとしく共にこれを相祝ふべきである。

然るに實際に於てかゝる目出度かるべき送別の席上にも、往く者、送るものの中に一抹哀愁の氣分の漂ふあるは、思ふに在校十年互に勵み勵まされ、月に花にと苦樂を偕にせる中に結ばれし相愛の緣影殘れるが、今互に離れ去んとして新らしく滾々として湧き來るのであらう。吾人亦永らく六道の里に漂泊ひつる程に、住みながらへば他郷の里にも宿執の忘れがたく、雨に風に思ひを偕にし樂を共にしたる恩愛の絆斷ちがたく、加へても、在りし日の懷かしき面影いまはなく、微風搖らぐところ縷々として立ちのぼる煙りの、消へてはやがてうすれゆく現實目前の果敢さに一入と在りし過去

を髣髴せしむるからであらう」と。

○

上人、引導御法語の一節

夫れ以れば、十方佛土に唯往生の法のみありて無二無三。佛、隨緣の說を除く。

看よ〳〵、三世諸佛、依念佛三昧等正覺を成す。無極の慈悲、法藏の發心顯れ、超世の別願仰で信ずべし。

爰、新沒去〇〇〇〇、久しく却外に埋もれぬ。今日歸家穩座の一句は何ん。

願我命欲臨終時。盡除一切諸障碍。面見彼佛阿彌陀。即得往生安樂國。

○

上人曰、自分の父母を呼ぶには、オ父ォさん、オ母ァさんと呼んで、太郎兵衞さん次郎兵衞さんなどゝ名前を呼ぶ者はない如く。

阿彌陀佛とは我々の大ミオヤの名前であるから、御呼び申すには矢張り親樣と云ふ方が相應しい、と。

○

上人、東都誓願寺御留錫の砌、一夕、淺草に活動寫眞を觀給はんとして出でたゝせけるに、生憎御所用なかりければ、供奉せし弟子某に命じて御用立せらる。その中も始終御こゝろよげに御觀覽ありて御歸寺　其後九州地に御飛錫し給ふこと二三年にして飄然五香に御歸院の節、弟子某を顧みさせて「アノ先達日、活動を見た時の借りがあつた、今返へす」とて御忘れなく御返濟ありき。

○

上人曰、凡べてに、逆ふと云ふことは良くない、道を行くに前方より車が來れば、牛が來れば、右に、左に避けて進むがよい、さすれば怪我はない。水中に陷ちた時等も、ソノなるがまゝに任せて居れば決して沈むものではない、もがいて出やう、助からうとアセリ逆ふから却つて溺死して仕舞ふのである。（以下次號）

二九

二八

上人御七回忌を病床に迎へて

慧月

尊いおなつかしい御聖人樣の御肉身にお別れして早七年となりました。

思へば私の樣なつまらぬ者にいろ〳〵と有難い御教訓をいただきながら今尙七年前と少しも變らぬ魂の醜さを省ますと聖人樣に申譯けない樣な氣が致します。せめて聖人樣からいただきました御言葉を一言でも皆樣に御殘ししたいと思ひます。

それまでは舊式の信仰でありました私が聖人樣に第一驚きましたのは、內海樣の奧樣が御立派な臨終をなさつたと聞きまして、聖人樣に私もどうぞあの樣な美しい臨終をさせて頂きたうございますと申上げましたら、聖人樣は即座に

「臨終なんかどうでもいゝ、ひつくりかへつて死んでもいい。」と仰せられました。

それから聖人樣の御供をして淺草邊の自動車の往來が大へん激しい中で電車を乘替る樣な混雜の場合に何時も聖人樣おあぶなうございますと袖を御引きしましたら、

「あなたは今如來樣を思つて居ります」かと仰せられました。

聖人樣の御肉身をのみ思ひ如來樣を御忘れしました事はほんとうに申譯もございません。この樣に汽車に乘る前乘客が立騷いで居る時にも御說法が絕へませんでした。斷へず〳〵如來樣を憶つて居れと云ふ事が聖人樣の最も大切なおすゝめでありました。

もし如來樣の御顏がはつきりと憶ひ浮かばねば、御月樣に目鼻をつけた樣なものでもよいから斷へず御顏を心に浮べて居る樣に、又汽車の中や道を行く時等向ふに山が見える時その山一ぱいの如來樣を憶念せよと御教へ下さいました。

又御別時の時には休憩時間でも少しも雜談せず斷へず如來樣を憶念せよとて各自に版畫の如來樣を御頒ち下さいました。又、

「あなたは御位牌を拜みますか」とお聞きになりますのではいとお答へ致しますと、

「それは、間違つては居ませんか。位牌を拜むのではなく、位牌の靈を如來樣にお救

三〇

三一

ひ下さいとお願ひするのである」と御教へ下さいました。

尙御聖人樣は或人が念佛信者の批評をしても、

「でもあの人は、よく御念佛をします、」と仰せられて必ず御念佛の何よりも大切な事を御教へ下さいました。

最も私の心に深く響きましたのは、大正九年八月の唐澤の御別時の時に聖人樣は好月樣と私とに、

「禮拜儀の中で、光明主義の眞髓は何れにあるか。」とお尋ねになりましたので、二人とも分りませぬと申上げましたら、聖人樣は嚴かなる御面持に、

「如來光明歎德章に盡きて居る。よく覺えておきなさい。」と仰せられました。

御別時が終へて後籠の正願寺樣にて、夜が更けるまで、好月樣は御肩を撫で私は蚊を追ひ乍ら御話を伺つて居りました。其の內にしんみりした御話になりまして、聖人樣が「九州では私が亡くなつたら、笹本を代りに立てゝ光明主義を奉じると云つてゐるがいゝ事ですね」とおつしやいました。それは結構ですが今頃聖人樣にそんな事がおありになつては困りますと申上げましたら、聖人樣は淋しく笑つておいでになりましたが、私は何だかその御言葉が氣にかゝつてなりませんでした。後より思ひあはせば全く其の時の御言葉は御遺言でありました。

此の事がありまして三ヶ月の後に御別れしようとは、夢にも思ひがけませんでしたいよ〳〵柏崎で御最期の時御重態の中から洩れるものは皆ありがたい御說法ばかりでした。殊に

「如來は常に在せども衆生にはわからない。それを知らせに來たのが山崎である」と獨言の樣に仰せられましたのは、深く身にしみて尊く感ぜられました。

今年の九月、聖人樣御往生の地の懷しさに、柏崎の御別時に參加致しました。けれど病氣の爲十分にお念佛も出來ませんでしたが、大慈悲の聖人樣は今度は形を變へて病床の御別時をさせて下さいました。ほんとうに病氣も全く恩寵である事をしみ〴〵

感じさせて頂きました。この程にお慈しみ深かりし聖人樣の御事を思ひ出すにつけましてもどうか御光明に蘇らせて頂き、私の心に眞の御七回忌を記念させて頂き度く思つて居ります。

辨榮聖人とわたくし

相馬千里

今より十餘年の昔であります、私が米國から二度目の歸朝をしました時であります永らく東京本鄕の大槻館へ滯在させてもらつて居ました。館の主人は聖人の親類であり幼な友道である染谷近太郎氏でありました。現に千葉縣木下町で製絲業を營んで居らるゝ伊兵衞氏の父君であります。

前日降つた雪が軒端に點々と殘つてゐた或る寒い晩でありました。私は早くから床をのべて小說を讀みながら横になつて居りますと、當家の親族で當時高商を出て電球製作の事業を起して居られた小林勝太郎氏（今市川町根本に住せらるゝ實業家）が室に來られて、今晩次の室で辨榮聖人の御說教があるから起きて來ぬかとの親切な御誘ひを受けました。靈の扉のさびついて居た私は申しました、

辨榮さんて米つぶへ字を書く人でしよう、有がたう……

私は床を出やうともしませんでした。

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と靜かな稱名のお聲が私の枕もとの障子への衣ずれの音にもつれつゝ聖人は次の室へお入りになりました。雪あかりの木鄕の横丁はひつそりとして居ました。唐紙一枚隔てゝ稱名のお聲をきゝながらも私の心の奧には何の米粒行者の說教とフフンと不謙遜な心が鎌首をあげて居りました。

七八人の人が集まつて御說教が始まりました。如來の光明は太陽の光りの樣にわれ等衆生の心を靈化して下さると云ふ事を動植物の例を引いてのお話と記憶して居ます

小說を手にしたまゝ人々の歸つたのも知らず、そのまゝ眠つた私、何と云ふ失禮な

そして不謹慎な荒んだ心だつたでしよう。それで口さきだけでは一かどの布教家のつもりで演壇に立つたのです。法を説く惡魔慈悲を説く盜賊尾のない狐こそ實にその時代の私の心の姿でした。ふと時計の音を聞いて目を覺し數へれば午前三時でありました。軒端のしづくもつらゝと氷つたか點滴の音もと絶えた眞夜中靜かに南無阿彌陀佛のお聲がもれて來るのは次の室であります。電氣もついて居ます唐紙の間より覗ひますれば袈裟をお頭の上より眞深に被りたまふ聖人は深夜の寒さもおいとひなく、机に向つて筆を走らせたまふのであります。其間にも稱名のお聲は絶えませんでした。あゝ雪の越路に聖人が化を遷したまひて茲に七星霜、御遺文お慈悲のたより今版に上りて世に出づときく、數百通の御文書の中彼の本郷の雪の一夜の御筆もこもるべきを思ふ。否一通一通の御文書は皆我等の休み吾等の眠れる時休みたまはず眠りたまはざる我等への大慈悲の血肉とたゞ涙するばかりであります。私は自分の生活を省みて感慨に堪えませんでした、眞に愧かしく思ひました。涙に床をぬらしました。あゝ惡魔と佛とは眞に紙一重の處に居たのでした。値遇の縁うすくまのあたり御在世中み教を仰ぎ得ざりし私が御文書を通じ先輩の御導きにより大み親の白道をたどらせていたゞいて居るのも、實は十餘年前の本郷の一夜の淺き値遇のお導きが深き因緣尊き力ありし事を喜ばずには居られません。

翌朝私が起き出でた時は聖人は雲の如く御立ちになつて、都大路に尊きみ姿を見失ひました。私は遂に溫顏に接する時期を長へに失ひました。されど其一夜、私に觸れたインスピレーション其不言無意識の感化は今私の心に活き〳〵とした強い力を感じます。果滿覺位のお聖人は必ず微笑して善哉と喜んで下さる事を深く信ずるのであります。

南無阿彌陀佛

合　掌

願　ひ！

中　村　辨　康

靜かな日だ。庭の落葉樹は皆な色濃く染めて晩秋の寂莫を一しほ深めて居る。本當に靜かな日だ。

阿彌陀佛に染むる心の色に出でば秋の梢のたぐひならまし。

故聖人樣のよく御引きになつた祖聖の御歌が思ひ出される。

噫々。故聖人逝きまして早や七年！

年月の流れが今更の如く私達に驚覺の音を私語く。何と云ふあさましい自分であらう、何と云ふ拙い自分であらふ。昨日過ぎ今日も亦た空しく暮れて行く！

ぐずぐずすれば日が暮れるとよく故聖人樣も仰しやつた。本當にぐずぐずして居れば日は暮れるのに、私は此六ケ年間どれ丈け如來樣の御惠みに對して報ひ得たであらふ！此事を思ふ時本當に涙なきを得ない。

然し乍ら其涙の半面にはかゝる反省の依つて來たる生活の事實を顧みる時、亦た一種の法悅を禁ずる事は出來ない。全く私達は惠まれて居る。私達は私自らの生活の中に兎にも角にも信仰に依つてかうして惱みなく而して元氣よく幾分宛でも自身を清め社會を清め行く自分を見出し得た事は、如來樣の御はからいとは云へ、故聖人樣が尊き遺產として分け與へられた賜物である夫れは本當に私達に取つて上なき賜物であつた

私達は此賜物に對しても御互に協力して故聖人樣の遺業を續ぎ、如來樣の聖業の一部分を受取つて、廣大なる聖旨に添ひ奉る可く如來樣の淨土を此土に搭らしめなくてはならぬ。

蘭菊其美を競ふのもよい。然し夫れは其各の立場立場に於て其の特質を發揮する丈であつて、互に其美を痛め合つてはならない。

私達の仕事は澤山に殘されてある。而かも其根本目的は御互衆生が成就されて行く事でなくてはならぬ。私達が如來樣の御名に依つて兄弟相互ひに協力する處に本當の

淨土が顯現するからである。

サドカイやパリサイの徒の多い現在に於ては、本尊の問題往生の問題、見佛の問題別時三昧の問題等教義に關する問題丈でも色々ある。況して信仰生活上の問題に至つては無數にある。是等を一々整理して科學も哲學も倫理も各宗各派に亘れる總ての宗教も社會關係の一切も皆悉く是認し得る純粹無雜なる正しき信仰正しき行爲正しき生活たらしめなくてはならない。よくよく反省し來れば私自らの中にも數多き迷信もあの無駄もある樣に思ふ。私達の一秒一秒が如何に有効に使はれて居るだらふか。私達の衣服や家具が如何に價値付けられて居るだらふか私達の消費が如何に社會を益して居るだらふか私達の愛が如何に貧困者や乞食や犯罪者や左傾主義者に及んだであらふか

如來樣の御慈悲は凡ての者が補處の菩薩として、地上に如來樣の正義と恩寵とを充たしめ以て神聖なる御國を建設す可く、いそしんで居る處に輝いてましますのだから此處に氣付き此處に働く可く凡ての人々はなつかしい同行であり同胞である。

まして無限より無限に連らなれる大宇宙の一角に生れ合せ、無始より無終に亘れる永劫の一瞬時に生れ合せた此の萬劫にも遇ひ難き難思議の因緣を思ふ時、凡ての人に皆均しく共に抱き合つて泣かざるを得ない。しかも與へられたる尊い生命にかくの如く刻々に削れて行く！。時計のチックタック！。オ、あの音こそは我等の生命の音ではないか。一夜一夜の眠り！。オ、あの寢床こそは死の彼方への誘ひではないか。此の狹い場所に此短い時間に本當の交り本當の仕事が出來なければ永劫に取返しのつかない恨みである。

私達の尊い命ちは全く如來樣からの預り物である。預らせて頂いた物である。かくの如く預らせて頂いた此の御惠みに對して夫れに契ひ得る自分達であつたらふか。

社會の爲めに盡くすと云つても其實自分の名に顧慮は無かつたであらふか。如來樣の御慈光を宣揚すると云つても、其實布施無きを喜んだであらふか。私達の心の奥には嗔劫の昧執深くして毒蛇の如きかうした氣持が事毎に首をもたせ上げて居る。我と

我心にまざまざと見せ付けられる此あさましさは本當に痛嘆す可き事だ。嗚呼、徒らに實利を思ひ徒らに形式に捉はれる。まだそんな事を云つて居るのかと笑はば笑へ。事實はさうである。私達も餘命はもう僅かしかないのだ。

法悅なき處に宗教はないと同時に深刻なる反省なき處にも宗教はあり得ない。よし入信の數日若しくは數ヶ月に於て感情が高まり歡天喜地の愉悅を感じ奇蹟の不思議さに驚いても、夫れは正しき平穩の姿ではあり得ない。健全なる姿は平穩にして而かも眞劍なる積極的精神の中にある。私達は法悅に目くらめいてはならない。歡喜に我を忘れてはならない。正しき信仰はむしろ信後の修養にある。煩惱との奮鬪にある。眞善美へのあくがれにある。願ひだ。祈りだ。銘々の別願に生きる事だ。

さるにても尙ほ痛切に思はれるものは、故聖人樣に今少しの聖壽を貸して頂きたかつた事だ。統一ある如くして統一なき我が教團を見るに附け、此感の尙一層切なるものあるを覺ゆる。

然し乍ら其責任は故聖人の薫董を忝ふせし私達の双肩にかゝつて居る。願くは單なる形式に死せずして、花は紅に柳は綠に、各々の時處緣に應じて故聖人の御德をして益々光輝あらしめ榮光あらしめて、愈々如來樣の聖業を完ふしたいものだと思ふ。

噫々、靜かな晩秋だ、本當に靜かであつた故聖人をなつかしむには最もふさはしい日だ。窓外には雀も鳴いて居る。風もない靜かな日だ。(一五、一一、七)

包み切れぬ感想

井上隆森

御七回忌に際しての感想……トテモ書ケない、亦云へない、筆や舌を動かした位のウワスベリものでは現はせないのです。殊に今回、非常な非凡な御努力をつづけて記念出版くだされた

「御慈悲のたより」を拜しては、一層書けもせず亦申上ぐる事もできなくなりました。

恰も唖者が奥床しい薫香を嗅いで、その實感味を現はし出すことが、出來得ないやうすと同じです……

一昨日來、竹内居士と對談時を忘れて
光明主義の大豫言者であらせられ、
光明學園の大創設者であらせられ、
現代佛教の大復古者であらせられ、
事をば幾度も語り合わせました、がそはれ片麟です、一滴です。ツマリ申せないのが眞であり、實である、然らば何うするのか??? この第七回忌辰を起點に、今よりは層一層の御靈育の下、ほんとに、どこまでも、

身（物質）方面と心（精神）全體の總てを捧げて仕へ奉らん

コレであります、ココであります。

今も現に〳〵靈應、常住に、我心殿に在まして、轉法輪を垂れ給ふてある。

敬愛する會員、光友と倶に〳〵總てを捧げて仕へ奉りませう、それが菩薩の大行であります。

大ミオヤを會長として頂く身、實に幸福者です、我等赤チャンは、腰元を強く持たせて頂きタトヒ火の中、水の底も、大威光明中だもの、菩薩の大行をさせて頂きませう

要は唯、體現にあり、實現にあり、實行にあるのみ、イヨ〳〵勇ましく決行、實行實現させて頂きませう。菩薩の大行を。（大正一五、一一、一〇、）

追白意志の腰元を強く、不斷光で育てられた體現者も日に〳〵增して參り、その二三を實證に述べたくもありますが、後報に讓りませう。

恩師聖人の牌前にぬかつきて

中川弘道

嗟々、恩師辨榮聖人、アナタは早くも化緣の薪つきてか、慈父の如くに敬慕して止まない幾多の群生を遺して、秋の入日の如くに、大ミオヤの御許に還り給うて星霜已に七周年を經ました。其間實に二千二百日、私は何をして居たのでありましよう、既往を追懷すると共に、實に感慨無量であります。

寸陰を尊とみ道の爲めに身心を献げよとの御教訓は、心腑に徹して有りがたく感じて居ますけれ共、種々の事情はそれを許しませぬ。イヤ、御恥かしい事でありますがまだどうしても自我の妄執にからまれて、眞に佛子の自覺より進んで聖意に契ふ務めを果し得ず爲めに心の奥の囁きは常にすまぬ〳〵を繰り返し惱ましい日を送つて居ます。常住ならぬ身の長き將來を期することは出來ませんけれ共、セメテ、アナタの十三回忌を迎える頃ともならば、幾分なりとも、アナタの御教導の御恩に酬らることが出來ようかと心窃かに期待して居ます。たゞ〳〵お恥かしいばかりであります。

愚かな私はそんな有樣でありますけれども、幸に他の尊き人師の方々は遺されし御教によりて、よく大悲の靈光に育てられ、丁度アナタの夫れの如くに、寧日無き御法の爲めの御活働は實に目ざましいものであります。其おかげで、アナタの御示寂後僅々六年間に、量に質にメッキリ增大されました、之れ素よりアナタの御在世中よりの御遺德によるのでありますけれ共、亦流れを傳う遺弟諸大德の努力の結晶であります近頃各地共に主義の普及、信火の熾烈、こゝ五六年間に木魚の市價を動かし、其製造者の增加率を示せる如き、又各地に交々開催さるゝ別時會に、眞劍に求むる士女の多くが、僅々五六日の修養により、忽ちにして靈に活き、眞に如來の子としての聖き生活に更生せられたる例證の少からざる、見聞の度に涙ぐましい程尊く悅しく感じさせられます。キット、アナタも之の現況を御照鑑あつて、ほゝ笑んで居て下さることゝ信じます。それにつけても、アナタの今に之の世にましまさばの感を深くするのであ

ります。

然るに爰に今一つ、アナタに申上たく思ひますのは、苦むす岩間の清水でも、最初の流れは純潔なものでありますけれ共、流れが長く下流となるに連れ、種々の汚物に汚されて、不純さを加ふるやうに、アナタの御一代の聖なる遺業なる光明主義の純なる流れも左まで、長くも無い僅かに御入滅後六年間、に傳持する人師の各々の私見を加えられてか、人師夫れ〳〵の異なつた流れとなり、傳えて下さる人々に依りて幾分宛の差點を見出し、所化の人々は其適從する處に迷うの有様、之れは時と主義の推移上止むを得ぬとは云へ、かくては年經るごとに、アナタの眞髓は沒却されはせぬかと杞憂するのであります。

勿論、歸趣に迷へる私共の指針としては、田中先生の大なる努力により、御遺稿の編纂刊行あれば、夫れを手鏡として黑白正邪の判別は就く譯でありますけれ共、悲哉生盲の私共は其能力に乏しく、迷ひ乍らもアナタの御在世當時親しく御導きを蒙りし微かな記憶を辿り不完全ながら聖き圓生の御法の枝を手折る外ありません。然し直接御化度の御緣に漏れたる世の多くの人々は、今や岐路に迷う外ありません、斯くては幾代經ても聖純なるべきアナタの御教の流れも年と共に渾沌たる狀態に陷りはせぬかと夫れのみ氣遣はれます、夫れに付けても今にアナタの御存命ならばの嘆きを一層深刻ならしめ、御在世の當時を追想するの念禁じ難きものがあります。

云何に御跡を慕うとも、今はかへらぬ愚か事とは知りつゝも、こゝに七回忌の聖辰を迎えると共に益々其感を新にするのであります。嗟々。

聖き御國に還り玉いしアナタ、幽冥界は隔てゝ居ますけれ共、私共群盲の身を憐れみ玉ひ、迷へる私共をして早く闇を破り正知見に住し、正道を辿りて聖きみ許に至らしめ玉はん事を、こゝに嚴かに念佛やゝ久しくして

恭々しく御牌前にぬかづき、捻香、合掌、低頭作禮して希念し奉る。

大正十五年十一月十日　九州の西端五島列島傳道途上

追慕

醉月英三

慈父上人様御七回忌に際し、不肖ながら私の感想を表白して御兄姉たる皆様の御目を汚したいと存じます。

私は上人様に御目にかゝつた譯ではありません。然し私をお念佛するやうに導いて下さつたのはやはり上人様ですし、又朝な夕なに片時も離れず幼い私の靈を哺んで下さるのはやはり上人様に在す。よしや肉身の上人様にお目にかゝらずとも、父にて在す事に何の不足がありませう。御遺稿の御慈悲滴る文字は唯書かれたる文字でありませうか。否生ける上人様現に其處に在して心に響き徹る御說法せさせ給ふではありませんか。我等を活かしめ給ふ大宇宙が即ち上人様御からだであり、念佛する眞正面に在して光明を以て我等が靈を御育て下さる如來様こそ、易らせ給はぬ上人様の本の御すがたでありませんか。

上人様は唯六十年の御化益のために此の土に御出で遊ばしたのではありません。盡未來際に亘る永遠なる大事業の基礎を此の光榮なる日本の地にお建て遊ばすために、降神出生なし給うたと信じます。然して見れば上人様御導によつて念佛する我等こそ上人様の代へ難い尊い使徒でなければなりません。上人様は常に仰せになります、「幻の如き汝の生命を擲つて　如來様の宇宙的大目的に參加せよ。」と。又上人様嘗てこんな事を仰せ遊ばしたと承りました、「釋尊が兜率天に在して愈々人類救濟のために印度にお降り遊ばす時には、其の御仕事を助けるため、兜率天に於て釋尊の御教を受けてゐた弟子達が我先にと印度に降る。いよ〳〵釋尊成道の時は其の弟子達が四方から集つて來て佛教を興隆する。」と。我等は此處に如來様によつて與へられた尊い使命を見出します。

世は正しく第二の釋尊を要し、新しき佛教を要する時であります。佛教の根は一つでも更に新しき芽を出し花を開くべき時でありませう。舊い歷史的な佛教が新しい西

洋哲學の徒を救ふことができませうか。徒らに煩論瑣談して二千五百年昔の釋尊の教を再び擡ぎ出して見た所で誰が承服して修行するでせう。現代を救ふものは現代にお生れになつた釋尊であらなければならない。釋尊を二千五百年前におかくれになつたとばかりする事はできません。區々たる名句の末に捉はれて、上人様の内に眞の釋尊を見得ないならば、誠に遺憾な次第です。

歴史は常に新しき〳〵進展を要します。二千五百年前の教法の儘でいかぬ所に世尊常在靈鷲山の意義がある。分化し統一しつゝアウフヘーベンして行く處に宇宙の進展があると信じます。我等如き佛教の傳統の中に育つた者ならばともかく、釋尊にあらぬキリストの教の中に育つた者を救ひ、其の産み出したあらゆる思想的産物——科學にまれ哲學にまれはた藝術にまれ宗教にまれ——之に終局の歸趣を示すものは一切を綜合する最高の宗教、舊佛教ならぬ光明主義の外にありません。

申すも愚ながら上人様の御思想は實に偉大に在す。世界の二大思潮、東洋のそれと西洋のそれとは上人様の御思想即ち光明主義に流れ入つて渾然たる融和をなすでありませう。而して新しき人類文化の花はその合一體の内より咲き出るでありましやう。

歴史を繙く度に常に感じます——彼の遠きギリシヤの昔の一天才アリストテレスの思想は今も尚人の心を照す燈明臺と仰がれてゐる。多くの勝れたる天才皆然り。人は何時も先に生れた偉大なる魂の思想を呼吸して生きてゐる。人類をより高くより淨き世界に導くものは實に此等の勝れた魂である——斯く思ひ來る時上人様はいよ〳〵崇くいよ〳〵高く尊せられます。絶對の安住處を求めてさすらふ多くの人々が遂には上人様を見出すでせう。涸き切つた上を濕す水のやうに光明主義が次第に人の心の中に浸み込んで行くでせう。そして最後には一切の人類が尊い如來様のみ光の中に共に安寧を得るやうになるでせう。

もとより斯の如き事によつて上人様御德が增すでもなく減るでもありません。法界遍滿常住無變の御德には在すけれども、小き我等の理想としては世界の人類の歩みの行手に大光明を投げ給うた上人様鴻大の御恩德を七年紀に際し謹んで讃仰したく思ふのであります。

鴻大なる佛恩を謝して

本生佛緣の顯現は、不可思議深甚微妙なり。

本間榮吉

回顧すれば、大正九年初夏、かねて心願たりし、西國三十三所觀音靈場巡拜の砌りその歸途、名古屋市、淸須の觀世音を參拜せんと欲しけるに、偶々市内の電車中に、一人の尼僧に出合ひ、光明主義信仰の盛んに流布されつゝあるを聞き、初めて辨榮聖人が佛教界に尊崇偉大なるを知るに至れり。

而して大正十年夏七月、一遍上人初開の靈場相州當麻大本山、山境内、辨榮聖者の御開設遊されたる光明學園は、私をしてその職につくを得せしむるにいたりしなり。

この間今日に及ぶや、星霜正に七年。仰ぐだに尊き大ミオヤの御惠み、春は華、秋は紅葉、雪月花、山海の多趣限りもなく、かくも今や學園も故聖人の大理想實現の一端緒たる寂光を見るに至れるは、就任當時を追懷して感慨無量、轉た血涙滂沱たるを禁せざるなり。

嗚呼、偉なるかな尊きかな、故聖人の御遺業たるこの輝きに充てる光明學園の將來大ミオヤのみ光りと共に永遠に壽ほき盡せぬことを冀ふてやまざるなり。

今日大恩教主の再現たる故聖人さま七週年を追慕するの紀念號を發刊するに當り、ミオヤの光り社の御意を戴して、感激の一端を記るさして戴くことを得たりしは、後信の徒、不省、欣喜に咽び、法悅に浸り、只管例ふるに由なきを如何にせんや。合掌

慈父聖人戀する心の現れ

小黒鹿造

ミオヤの光明念じつゝ
あゝ世の中は明けくして最と暗らし
思へばつゆのたゆる時なし
世の中は最と暗らくして明けになり
うれしきつゆのあふるるぞ知る
人生の最大高德とはたゞ
自己の無智無能を覺るに在り
彌陀したふ人の中にも人ぞ無し
誠に戀せ己がミオヤを
戀したふ念佛にミオヤは現はれて
慈悲の御法を王子に說きます
念佛に形を見るなと諸人が
口には云へど見るぞ悲しき
愛無くてなんの己れが念佛者よ
唱ふるこいに愛ぞ現はる
念佛者が心の中のその奥は
阿彌陀ほとけぞ知ろし召すなり
雪や氷り三塗の中もいとふべき
阿彌陀と共にミオヤと共に
思ふ事つらぬかずしてやまぬこそ
光明主義の念佛者よ

追慕辨榮上人

中川察道

かくまでも尊く育つ道ありと
のりを示せし御跡したはし
まのあたり權化を拜みて覺り得ぬ
在りし昔ぞかなしかりける
大ミオヤの聖旨傳へし法の師の
たへなる御聲聞くよしもかな
一筋に御名を稱へて進むこそ
きよきかたみと思はるゝかな

光明學園の建築

園長平野聞榮

宇宙の秘鍵を開發し、吾人の生存に永遠不滅の生命と不變常樂の光明を賦與せられしは實に、故聖人の御首唱御宣揚し玉へる光明主義の信仰是也。

翻つて相州當麻山上の光明學園は聖人御遺業の一にして當時聖人が關係者に寄せられたる御遺文を拜するに『世の中は持ちつもたれつにて候中には或は辨榮に對して非難を爲すものあらん、如何となれば學園などの餘計なものを立て人々を煩わすと云ふものあらん、是れ人間の活役にて人間は義と云ふものを盡してみたひ性を持つてゐる餘計に苦しみて義を盡して見たひ、而て他人にも義を盡さして見たひ全く辨榮はいつでも只世の爲し人のため己が身を苦しむを却つて樂しみとしてをる云々』なる仰ぐだに勿體なき悲痛なる然して恒久不拔の御深意を包藏せられたる斯かる尊き教育機關な

り。

猶聖人は『學園の基本財を作るため兼ての越後國羽賀氏の心配して呉れるものは、此れは自分の佛畫を認め夫々有志より財を集めて呉るゝことゝ相成候、此著中休を利用して其事に從事したくも、此も其準備として差當り五百圓は要すべく候、合して本年中に爾後學園の外二千五百圓働き出して義務を果さざればならぬ事。一に皆愚納の體軀の汗と膏よりしぼる外に道なき事是も皆、如來樣がお使ひ下さるものとして歡喜の中に職務を取り候へ共、夫れでも限りある膏なればと思ひ候へば云々』と此慚愧に堪えぬ御軫念を拜しては吾々信徒或は聖人を渴仰讃嘆する者の如何に血涙至情の感激を以て學園經營發展のため盡さゞるを得んや。顧れば昨年五月四日なり、聖人の汗と膏との結晶として遺されたる學園は經營危機に遭遇し、風前の燈火にも似たるが如きを呈せしが、時機相應、是が輓回發展の端緒は打開せられたり。即ち光明學園は爾來其教室を寺の庫裡二階に設置せられ、三教室借用使用中なりしが年々增加し來る入學生徒收容に於て限りある教室は是を許さず、遂に信徒、有志等は校舍新築をなすべく滔天の至誠を以て協商議定したるなり。其第一歩として設立組織の向上を計り、大正十五年三月十七日附、神奈川縣知事より設立認可書下附せられたるなり。(希くば本學園をして近き將來に於て文部大臣認可の中學たらしめんことを期しつゝ) 是が議を重ねること八十餘回、星霜正に一年有半。關係者一同にありては精魂氣魄を盡して、一日も早く寂光の成果を望み見、聖人渴仰の赤誠を致さんと冀ひたるなり。即ち本年八月廿七日、無量光寺より永久無償貸與せられたる二千三百餘坪の敷地に於て、關係者並に學園生徒卒業生等約三百名參列の下に地鎭祭を執行し、續て大聖人の忌日たる十月四日、起工に着手同月廿三日、盛大なる上棟式を擧行するに至れり。其地は一遍上人七百年來の靈地龜形峯上東岳にして、今や光明學園は新材の香も芳し、聖人曰『寺も節約して餘財あれば園を助け園は又寺を助けて地方の精神界に供するなれば、七年の後には必ず應分の効を奏することあらん。今や光明主義大に開けたり、茲に於て有

爲の材を養成して國家の爲に資するあるに至れば幸の至りに候。』又或時は『學園は本より義を以て起りし事なれば、義俠を以て助くる者の力に依らざれば永續し難きことゝ存候云々』と。

恰も今年は故聖人、御入滅後七週年、本學園御開設正に七週年、實に秘義深甚の秋なり。故聖人御追慕のため、以上開陳の趣旨に讃同せられ、大方の諸彥擧つて應分の御喜捨、御寄附あらん事を希乞ふ。

本學園役員氏名

理事設立者代表　椎本　戒淨　同園長　平野　明榮　同子爵　三島　通陽　同海軍少將　犬塚助次郎
同兼會計　竹內喜太郎　同　渡邊　信孝　同　齊藤　五郎　同　柴　武三
同兼書記　本間　榮吉
評議員　藤本淨本　同井上隆森　同高橋猪久治　同山崎辨誠　同伊藤萬吉　同渡部卯平　同遠藤誠一　同關山泰助　同關山英作　同金子平吉　同小林重良　同若松勘次郎　同若林太重郎
相談役當麻大本山主長島大道　同清水源十郎　同小林瑞藏　同中島軍之助　同松本君之助　同落合治三郎

校舍新築費並維持基金豫算表

一金　五萬　圓也　（募　入　額）

內譯　一金壹萬五千圓也　校舍建築並什器費
　　一金參萬五千圓也　經營維持基金

追而　右寄附金御送附ノ節ハ東京市牛込區南榎町五七番地竹內喜太郎（振替貯金口座東京二四四九〇番）又は東京市麴町區永樂町二丁目一番地安田信託會社宛御送附相成度此段御願申上候

×　×　×　×　×

第七回忌記念出版の「御慈悲のたより」及び「道詠集」の各一節が次に転載されて居ります。念のため……（編者注）

御七回忌記念出版

辨榮聖者御慈悲のたより

の一節

六十四

艱難困苦を經て精神を養はざれば眞實に鍛錬しがたし。いかなる艱難も經れば經るほどに自己の氣まゝなる垢滓が除けて心靈の光明を發すべし。

如來の慈悲を力としていかなる苦難をも甘受するにあらざれば心靈の光は發揮せざるものなり。

人の心靈は名刀の如し。刀劍にして若しサビある時は之をトギて其サビを除き去る

ならん。甚だしきサビに至つては荒砥を用ゐて其サビを除き去ることあるべし。若し刀劍にして其荒砥を厭ひ嫌うて之を避けなばつひにサビを去りて名刀の眞價を顯すに由なからむ。人の心靈にして能く練磨して氣質のサビなければいかなる困苦もいかなる境遇にも泰然として不動の心をもつて安んずることを得べし。

事毎に對して非常に憂愁し煩悶する如きは出來事の其性質に於て苦たるにあらずし之に對する人の精神中の煩悶其ものに煩悶と感ずるなり。

同じ事に對して甲の人は甚だ煩悶し乙の人は平然たる如し。前者は煩惱の垢質甚だ強度に有すればなり乙の人は氣質のサビが薄き爲なり。

若しいかなる境遇に臨みても平穩沈靜にして心波を動するに足らずと云ふ如き不動の心念を得んと欲せば其サビを取り除くべきにあり。

サホドに其事實に於ては苦悶すべきほどの事なきに非常に風の音激しく汝の爲めに刺激を與へて本よりサビ多き汝をして益〻煩悶の波動を高からしめたるは

ミオヤが汝の煩惱のサビを除き去りていかなる境遇に於ても安穩不動の心力を起さしめんが爲の方便たることを忘るべからず。

かゝる苦難はしばし經るに隨つて鍛錬功を得べし。傷むべきにあらずして眞實の修行を望まばかゝる憂は寧ろ歡迎すべきことである。

ミオヤに對して將來我身を無事にして種々の事の起らぬやうにと祈ること勿れ。よりは、いかなる事に値遇すとも安然として不動の心力を與へ玉へと祈るべし。

汝自ら種々の苦難に對して不動の心力を得たならば將來暫つて世の不幸なる心に惱多き女人のために煩悶の中より救ひ出すやうに

ミオヤに祈りその道のために身を献ぐべし。

眞實に自ら苦難經驗なきものは眞實他人の憂苦に對して同情をおこすことなしとは眞實なり。

世には他人の憂苦に對して同情を以て之に慰藉を與ふることなきのみにあらず還つ

て他人の憂惱を喜ぶものさへあり。そはその性情にもよるものゝまた一には自ら眞實の苦難を嘗めたる經驗なきにも由るべし。

むかし崇德院の天皇は無實の罪によりて萬乘の身にありながら四國讃岐の國に遷されたり（即ち島ながしの難）然るに其罪なきよしを幾度か都の方へ傳へられしも用ゐられざりければ、つひに一心を勵まし自分の血を以て三部の大乘經をうつし一心に三寶を念じ誓を發して曰く、我無實の難に苦む、願くば後々の種々の苦難にあふものゝ爲に其の苦難を救はんと。一心金剛の如し。つひに身は崩し玉へども其の靈は金比羅大神として今尙世を利益しつゝあり。

罪なきよき玉體にしても尙かゝる苦難あり。況んや罪に充さるゝ身の苦難多きは數の免れざる所。然れどもこのすべての機會は其身をしていかなる苦難にも憂惱にもうち勝ち得べき心力を修養せよとの命なるを忘るべからず。

凡そ人の修行中に學術よりも技能よりもすべてに超えて最も第一として貴むべきは自己の精神を修養し

如來の光明其腦裡に常にかゞやきつゝありて、いかなる境合にも安然として動せず、而して其胸裡の光明は慈愛の源となりて他人に對しては同情となり怨親平等に人を怨まず憎まず自ら恣ならず人格高等にして理想高尙にして遠大なる希望を有し常に希望の光明は斷ゆることなし、かゝる人こそ人中の最勝者たり。高等なる人格を修養せんには種々の困難と辛苦とを經ざるべからず。御身は已に此機會を

ミオヤより與へられたり。然るに之を思はず之を考へずしてこの修行の機會を逸するならば何の日か修養すべきぞ。

只寧ろ要せざる心意を用ゐ、修すべきをすて、思ふべからざることを思ひ、考ふべからざることを考へ、貴重なる光陰を空うする、いかに愚なるぞ。

御身はこの好機會なる砥をすてゝ、斯ることをすまして平生無事にして錬修せんとする如きならば、いかに無下なるぞ。斯る好機會を得ざるものは終身實地の修養能はざるなり。

予は思ふ。御身の愚なる、この好機會を左は悟らずして、これがきまりつきて、心安らかに修養せんといふ如きぐづ〳〵淺ましき日暮しすることならん。これぞ御身が永年月を空しく經過して精神の光明を發揮すること能はざる所以なり。

斯かる人に對していかなる砥を與ふとも其錆刀を磨くべきを知らず、砥をはなれて外に磨くべき機會を求むる如きは愚もまた甚しきなり。

今回の事にしても事實はさまでの事にあらず。只御身をして鍛錬せんが爲に其聲を高めたるに過ぎず。然るを御身は錆を除き去るを悟らずして却つて憂愁の習慣を增す機會の如く感じたるべし。愚もまた甚しきにあらずや。

折角に身を佛門に寄せ肉の生活を本位とする人と同じ觀念を以てするとは何ぞや。世に精神修養なきものほど不幸なるものあらじ。

自ら苦をつくり出して自ら苦む。

光明を求むるものは不幸を轉じて幸福とす。災を變じて福とす。斯かる機會のあるに非ずはいかでか鍛錬を得べきぞ。

然れども御身は云ふならん。他の事ならばいかなる事にても安忍すべきなれども此事ばかりは憂惱せざるを得ずと。そも〳〵之が修養の機會を逸する元因なり。若し全く修養の精神あらばそれと反して言はん、他の事ならば兎まれ、この事にして安忍し鍛錬せずんば何の事にてか修行すべけん。之を喜ぶに至つて初めて一分の修養をせしものと云ふべし。

御身は只いかなる事にも驚動せざる精神修養だに成すならば足りぬべし。

ミオヤを賴め。

然らば**ミオヤ**はいかなる力をも與へ玉はん。

女子はかよはきは天性なり。然れども全く心一に至るときはまたいかなる事にも動せざる金剛心も却つて男子よりは强きにいたるもまた天性なり。何ぞ一心に信念を養

ひて精神の奥に潜める金剛心を發揮せざるぞ。

此他の事を云ふべきは御身は必要あるを感ずるならんもそは何にてもよろしきことにて、只要す、貴重の光陰をこの修養に用ひられんことを。

一二二

御七回忌記念出版

辨榮聖者 **道詠集** の一節

私のおのがはからひうちすてゝ
たゞみこゝろにしたがへよかし

殊勝げに珠數つまぐりて高念佛
心の鬼をさていかにせむ

大宇宙を盡して己が物なれば
是と彼とに執着もせず

人の爲め世の爲なればつくしてん
高きのぞみに我を忘れて

かぎりなきみのりの藏にかぎりなく
まなばんものよこゝろおこして

四三

はてしなくかぎりもしらぬ天空に
かけほしきまゝかけまはるかな

いさぎよきこゝろざしよりなすわざは
くるしみさへも樂しかりけり

ミオヤより受けしまごゝろまもりては
惡魔のためにうばはれなゆめ

摩訶般若波羅密の船にはやてふく
薩般若のかたにむけてさをさせ

けはしくも忍ぶの山路越えゆかば
いと安らけき道に出づらめ

火にやかれ鎚に打たれてくろがねも
くろがねをきるつるぎとはなる

ぬす人のすみ家とかつて知らざりき
いと怪しげの我胸のうち

機あらばしのび出でてはいたづらを
なすものゝすむ胸にてぞある

ともすれば惡魔の虜となる己が
こゝろ己にうら恥かしき

惡魔とてまことは正體なきものゝ
光のかげし心なりけり

四五

四四

慾に目のなき煩惱のほしいまゝに
　ゆくへのほどぞ恐ろしきかな

ぬす人の棲家と知らば我胸を
　かくまで心ゆるすまじきに

再びはかへらぬけふと知りながら
　なほいたづらに過しやしつらん

禍をのがしてかしと祈らざれ
　耐ふる力こそあらまほしけれ

あきらけき聖旨の照すみかゞみに
　日にいくたびかうつしてぞみむ

大正十五年十一月廿五日印刷
同　廿八日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢（郵稅共）
年拾貳冊　貳圓（郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人　小林七太郎
東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番